

課題解決へ地域と連携模索

「地学協働アワード」津別高準V

【津別】地域と連携して課題解決に取り組む高校が成果を発表する「北海道地学協働アワード2023」（道教委主催）で、津別高（太田徹校長）が準グランプリに選ばれた。町民や町内の企業、役場とともに地元の自然や歴史、産業の姿などについて学ぶ「つべつ学」の授業を長年続けていることが評価された。

郷土学習「つべつ学」評価

「つべつ学」の授業は2019年度に始まった。1年時は自然や基幹産業である農業、林業について学ぶ。2年時はまちの歴史や行政・議会の仕組みへの理解を深めるとともに、北大公政策大学院の学生団体「HALCC（ハルク）」との連携授業も行う。3年時に成果をまとめて発表する。同アワードは2月16日に札幌市で開かれ、参加15校をオンラインで結んで行われた。各校が活動内容を発

表し、道教委や社会教育の専門家が審査。津別高は「全教職員の意識、生徒の主体性の高まりが感じられる」と、グランプリの本別高（十勝管内本別町）に次ぐ高評価を得た。3月11日に津別高で行われた表彰伝達式で、桑原知己・オホーツク教育局長から表彰状を受け取った太田校長は「生徒、教職員の励みになると喜びを語った。また、「つべつ学」の授業計画などを中心となって

まとめてきた上田弘恵教諭（47）が本年度の道教育実践表彰の教職員表彰、ハルクとの連携授業などに携わった平子裕教諭（28）が実践表彰で新任教諭対象の初任段階表彰をそれぞれ受賞した。

上田教諭は「評価してもらいうれしい。新年度もよい授業を行いたい」と意気込み、平子教諭は「第一に評価されるべきは生徒たち。地域の方々あつての受賞」と話した。（青山秀行）



3年生による「つべつ学」の成果発表会
昨年9月



準グランプリの表彰状を受け取った太田徹校長（左から2人目）、道教育実践表彰を受けた平子裕教諭（同3人目）と上田弘恵教諭（左端）